



取材のお願い

第60回記念

日本現代工芸美術展 東海会展

2022年7月2日（土）～7月31日（日）

公益財団法人古川知足会 古川美術館 分館爲三郎記念館

—現代工芸美術展とは—

創立60年を間近に控える(社)現代工芸美術家協会は、1961年に我が国最大の美術団体「日展」の第4科(工芸美術)に所属する工芸家を中心に設立されました。1966年2月24日に社団法人現代工芸美術家協会となり、2013年2月1日に一般社団法人現代工芸美術家協会へ移行。協会の会員は、北海道から沖縄に至るまで分布し、全国15ブロックにわたる支部組織としての地方会を擁し、本部と地方会が緊密な相互関係を保ちながら様々な活動を展開しています。



(図1) 亀井 勝「風物語 今」

現代工芸美術展のなりたち

1960年代の初頭、現代美術のあらゆる分野における新しい運動は国際的な規模で胎動し、日本の工芸分野においても既成の工芸に対する批判が昂ぶっていました。その気運をいち早く捉え、先導的役割を果たすべく発足されたのが現代工芸美術家協会です。

協会が標榜した《主張》を抜粋すれば「現代の工芸という言葉は、自ら過去の工芸という言葉と対照される。過去の工芸とは我々の時代から既に遠のいた歴史的反省の存在価値しかないものを指す。之に反撥を感じ批判を加えると同時に、現代を吸収し消化し生きた生命を感じつつ制作した作家の所産を現代工芸と名づく。

由来《工芸》というものは用と美の抱き合ったものだという観念が色々の解釈を投げかける。機能を主としつつも美的な処理を行うインダストリー・デザイン、合理性と経済的思想から生活過程に随伴することを本義として自ら量産を予期する生活工芸、或いはこれと同巧異曲である様相を呈しつつも製造手段を手製であるべきことを主張するクラフト等々に、外国の直訳的工芸批評家を加えて正に世は紛々たる状態である。

然し工芸の本義は作家の美的イリュージョンを基幹として所謂工芸素材を駆使し、その造型効果に依る独特の美の表現をなすもので、その制作形式の立体的たると平面的たるとを問わず工芸美を追求することにある」と記されています。

この「主張」を旗印として、日本における新しい工芸分野の開拓を目指した本協会も、今日、一応所期の目的を達成し、今後それをどのように展開していくか重要な岐路に立たされています。創立当初の「現代の工芸は現代の新しい解釈を要求する」という主張にも反映されている通り、時代に即応した工芸の姿が求められているといえます。作家たちはそうした中で新時代を見据え、新しい工芸の創造に切磋琢磨しています。

第60回記念 発展し続ける工芸の光

1961年に発足した現代工芸美術家協会は、新しい工芸分野の開拓を目指し、現代工芸運動を展開しています。工芸の多様な素材を駆使し、作家の美的感覚によって独自の美を表現するその活動は、伝統に偏りがちな工芸界に新風を巻き起こしました。

現在もなお、現代工芸美術家協会会員が独創的なコンセプトによって表現した多様な作品による公募展を全国各地の美術館で開催しています。そして今年はその節目の年、60回記念展が名古屋では2022年5月3日より開催されました。

現代工芸美術家協会の作家たちは、工芸素材を駆使しながら自身の感動や感情を作品として発表しています。それは技と美を兼ねた絵画にはない工芸ならではの魅力です。長きにわたり工芸は芸術の1ジャンルとして絵画と肩を並べ展示できるよう、美を追求してきました。その結果、日本の工芸は日本を象徴する文化の一つとして諸外国から高い評価を得てきました。しかし、20世紀以降多様に変化する美術形体の中で工芸も新しい展開を見せなくてはならない時がきました。

そこで東海地区の記念展として開催する本展は、これまでにない新たな試みに挑戦します。会場となる古川美術館はホワイトキューブの展示室と、昭和の香りを色濃く残す数寄屋建築の分館 爲三郎記念館の2館。この2つの建物の特徴を生かし、美術館ではじっくりと作家の表現に対峙する空間を、そして分館 爲三郎記念館では工芸作品を用いたインスタレーションとして空間すべてを演出します。現代工芸美術家協会の作家にとってインスタレーションは初となる試みで、各ジャンルでチームを作り、一つのコンセプトを作品化していきます。



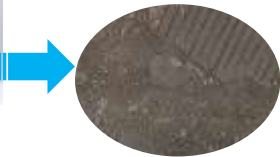
(図2)陶芸部門インスタレーション「未題」

— 細部 —



(図1) 亀井勝「風物語 今」

東アフリカのチュニジアで出会った壁をテーマに近年、作陶を展開する亀井勝。大胆なフォルム展開も見事だが、作品全体に漂う重厚感こそがこの作品の見どころ。土のもつ無限な魅力を壁を通じ改めて実感した作者の現地の驚きも作品から感じられる。



—ここがポイント!!—

作品の表面に見えるひっかき傷のような装飾にも注目。均等にひかれた装飾は作者の緊張感も伝える。壁の朽ちた様子は土の表面の処理を変えて表現していることも見逃せない。

— 感性 —

同じ染色作品でも、作者によっては表現が千差万別。作者の言葉にならない感性が作品に込められている。近年、二宮(左)は女性らしい視点から生まれる大胆な画面構成と色彩展開が魅力。廣山(右)は日本古来より使用されてきた柿渋や藍を用い、洒脱な作品を手掛ける

—楽しみポイント!!—

この2作は作者が「目」で見たものではなく、肌で感じ取ったものが作品の根底にあります。作者が何を感じたのか想像しながら作品を鑑賞することも楽しみ方の一つ。



(図3) 二宮祐子「華 2021」



(図4) 廣山三千代「刻刻」

— 温故知新 —



(図5) 浅井啓介「黒い窓VI」



(図6) 横井都「集う」

漆は英語でJAPAN。その名が象徴するように、日本の伝統的な工芸のひとつ。浅井(左)は、伝統的な漆という素材を使って、抽象的な表現を追求している。横井(右)は造形豊かな作品を手掛ける。漆の持つ光沢と箔の使い方が美しい

—ここがポイント!!—

浅井が技法として使用するのは家業で継がれ来た秘伝の技法だ。古きものを現代に合わせて使用する、まさに温故知新の世界観である。

— 情感 —



(図7) 八田洋子
「たびにでようとおもうけれど」



(図8) 栗本雅子「湖上の霧」

人形は宗教的な祈りや崇拝などの対象、そして愛玩物として古代から日本人の生活に関わり、手工芸品として大きく発展した。同じ人体表現でも彫刻は造形美が求められるのに対し、人形は作者の心情表現が鑑賞のポイント。

— 造形 —



(図9) 竹河いみ子「波動」

竹や籐を使用した作品は、素材のしなやかさを活かした造形美が鑑賞のツボ。さらに目を凝らすとその美しい均等な編み目が堪能できる。

—ここがポイント!!—

籐の作品によるインスタレーションを為三郎記念館で展開。そのテーマは光と影。流れる様な籐作品の美しい網目と部屋全体を演出する光もご期待



① 亀井勝「風物語 今」

広報使用画像

※ご希望の方はご連絡ください

◆古川美術館

担当学芸員: 林 奈美恵

電話: 052-763-1991

mail: n_hayashi@furukawa-museum.or.jp



② 曽根洋司「その向こうに・・・Ⅲ」



③ 梅田洋「ヒカリノ稜線」



④ 八田洋子
「たびにでようとおもうけれど」



⑤ 二宮祐子「華 2021」



⑥ 竹河いみ子「波動」

展覧会情報

展覧会名称
第60回記念

日本現代工芸美術展 東海会展

会場

古川美術館館 1階展示室 2階展示室
分館 爲三郎記念館

会期

2022年7月2日（土）～7月31日（日）
午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

休館日

月曜日

主催

一般社団法人 現代工芸美術家協会東海会

共催

中日新聞社 CBCテレビ 東海テレビ放送

会場協力

公益財団法人 古川知足会 古川美術館 分館 爲三郎記念館

後援

愛知県、名古屋市、愛知県教育委員会、岐阜県教育委員会、三重県教育委員会
名古屋市教育委員会

【お問い合わせ】

公益財団法人 古川知足会 古川美術館・分館 爲三郎記念館
電話 052-763-1991 F A X 052-763-1994(学芸課直通)
〒464-0066 名古屋市千種区池下町2丁目50番地

担当学芸員 林奈美恵 (n_hayashi@furukawa-museum.or.jp)

～アーティストトーク～

現代工芸美術展東海展の出品作家が作品を解説します。ぜひご参加ください。新型コロナウイルス感染症拡大状況に応じて開催内容に変更が生じた場合、古川美術館HPでお知らせします。

日 時 | **会期中(7/2-7/31)毎週土曜日 各日14:00～(30分程度)**

参加費 | 無料・予約不要 (別途2館共通入館券必要)

会 場 | 古川美術館

当 番 | 7月2日 浅井啓介 竹河いみ子
 7月9日 波多野正典 水野真澄
 7月16日 浅井啓介 堀 菱子
 7月23日 亀井 勝 曾根洋司
 7月30日 梅田 洋 小山田尚弘

～すきな茶碗選べるタイム in 数寄屋 de Café～

お好きな出品作家のお茶碗を平日限定でお選び頂けます。
 自分で選んだ器で至福なひと時を過ごしてみませんか？

日 時 | **会期中(7/2-7/31)平日(火・水・木・金)の10:00～12:00**

料 金 | 呈茶代700円(税込・別途2館共通入館券必要)

会 場 | 爲三郎記念館「数寄屋 de Café」

気軽に一服「木曜茶席－出品作家の器でお茶時間－」

毎週木曜日に気軽な茶席を開催します。出品作家のお茶道具を使用し、
 本席限定の作家デザインの上生菓子をお楽しみください。

日 時 | **2022年7月7日・14日・21日・28日**

①10:10 ②10:50 ③11:30 ④13:10 ⑤13:50 ⑥14:30 ⑦15:10

定 員 | 各席9名

料 金 | 1,000円(税込・別途2館共通入館券必要)

会 場 | 爲三郎記念館「桜の間」

会 場 | 呈茶付単館券・呈茶回数券・呈茶招待券の方は追加300円にてご参加いただけます。

予約は不要です。開館10時より爲三郎記念館内の専用受付にてお申込みください